

第11回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会

テーマ：分断を乗り越え、共に生きる社会へ

～生涯学習からはじめる平和と多文化共生の探求～

令和7年12月12日（金）・13日（土）の2日間に合計408名の参加を得て、11回を数える関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会を開催しました。三の丸庁舎の廊下が希望する分科会へ移動する社会教育委員や公民館関係者、地域活動実践者等で溢れ、コロナ禍で途絶えていた「草の根の活動者」が集まり、地域課題を発表と対話で共有する場」という原点に立ち返る大会とすることができました。



特別講演「分断と砲弾の時代どう乗り越えるか
国際協調主義と日本の役割」
一般社団法人共同通信社
特別編集委員兼論説委員 半沢 隆実 氏



トークセッション
「平和と多文化共生社会の実現に向けて
～未来のために今私たちができること～」

第11回を迎えた本大会は、会場を「茨城県水戸生涯学習センター」へ移し、新たな10年への第一歩を踏み出しました。「平和と多文化共生」をテーマに掲げた今回は、現代の分断を乗り越える「学び」と「つながり」の意義を深く問い直す場となりました。特別講演や若い世代を交えた対話、そして12におよぶ多岐にわたる事例発表を通じ、地道な「人づくり」や「地域づくり」の営みが明日への希望を紡ぎ出す確かな力であることを再確認いたしました。社会教育への期待がかつてなく高まる中、本センターが皆様の新たな「対話の拠点」となり、ここから生まれたネットワークと知見が各地の課題解決を支える大きな駆動力となることを確信しております。

（実行委員長 長谷川幸介 大会報告書より）

「つながる笑顔 広がる輪」

令和8年2月14日（土）県北生涯学習センター

【プログラム】

アトラクション
開会行事
実践発表①
実践発表②
参加者間交流
閉会行事

この発表会は、地域課題や現代的課題の解決を目指して活動する公民館や地域の有志による実践事例の発表、そして研究協議を通して活動を共有し、参加者同士の交流を深めることを目的に、今年度初めて実施しました。

当日は、ラピスラズリの皆さんによるリコーダー演奏で幕を開け、会場は和やかな雰囲気に包まれました。



「かぶと虫の里」14年の歩み（交流人口増を目指して）折橋芸（能・農）部



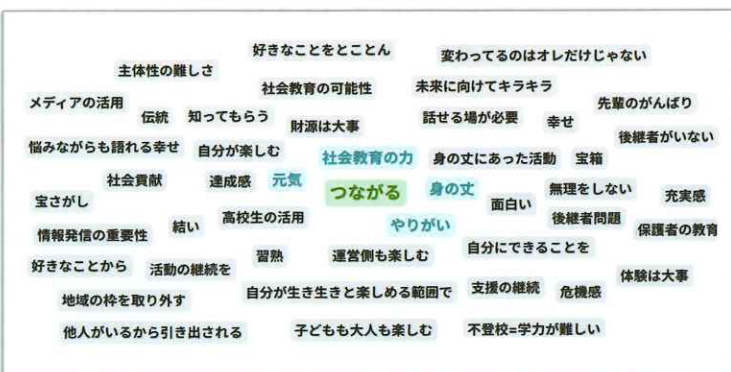
1999年地域を盛り上げることを目的に結成された折橋芸（能・農）部は、東日本大震災後「東北の子どもたちを笑顔にしたい」という思いから、かぶと虫を気仙沼へ届けました。この取り組みをきっかけに、地域の子どもたちが交流し、自然体験ができる場として「かぶと虫の里」を開園しました。夏休み期間の10日間のみで開催ですが、かぶと虫の生態を学ぶ野外学習をはじめ、ヤマメのつかみ取り、流しうどん・そば、バーベキューなど、多彩なプログラムを実施しています。これまでに延べ6,400人が訪れ、地域の夏の風物詩として親しまれています。参加者からは、「自分たちの楽しみが地域課題の解決につながっていることが素晴らしい」「地域を盛り上げるには、地域の人を巻き込み、無理せずゆるく続けていくことが大切だと感じた」といった声が寄せられていました。

「子どもたちの未来を作る学習支援」特定非営利活動法人ひたち NPO センター with you

2002年に設立された with you は、子どもたちの「学びたい」という思いに応えるため、無料で学習支援を行っています。また、特別な配慮が必要な子どもや不登校の児童生徒を対象としたフリースクール事業にも取り組んでいます。無料塾に通う児童生徒の家庭では、親子の会話が増え、関係が深まるなど、家庭内での良い変化も見られています。昨年3月までに無料塾には130名、フリースクールには6名が通っており、現在も多くの問い合わせが寄せられています。参加者からは、「次の社会のために子どもたちへのサポートをしたい」「学校教育だけでは完結しないからこそ社会教育が大切だと感じた」などの意見が交わされました。



参加者間交流（全体共有）



今回の発表会では、グループ協議の際に参加者の感想や意見を各担当者がスマートフォンで入力し、その内容をリアルタイムでスクリーンに投影する仕組みを導入しました。全体共有の時間には、投影された意見をもとに振り返りを行い、参加者全員で理解を深めました。スクリーンには、本発表会のテーマである「つながる」というキーワードに加え、多様な視点や率直な意見が寄せられ、活発な意見交換の場となりました。

「つどう」「まなぶ」「むすぶ」サロン

世代を超えて心が通う！高松公民館が創る「新しいふるさと」の形 ～学校・地域・伝統がひとつになる高松地区の挑戦～

高松地区の「絆」の拠点として

鹿嶋市の高松地区では、自治会の加入率の低下や少子高齢化といった課題を地域の「つながり」の力で前向きに乗り越えています。その中心を担うのが、高松公民館と「高松地区まちづくり委員会」です。91名の委員が主体となり、「世代を超えて助け合い 人と地域が元気に育つたかまつ」を合言葉に、全国的にもユニークな活動を展開しています。

ここが特色！！高松地区の3つのシンボル

○ その1・・・【伝統を繋ぐ】160年の響きを次世代へ「木滝あんば囃子」



文化祭で木滝あんば囃子

かつて自治会単位での継承が難しくなった伝統芸能「木滝あんば囃子」。現在は、高松地区全体で守っています。公民館まつりで、保存会や芸座連と子どもたちと一緒に発表する機会を作り、来場された多くの方にみていただく機会を作っています。

高松地区の伝統を「地域の宝」として大人から子どもへと手渡していきます。

○ その2・・・【学校と繋ぐ】中学生と住民が共に走る「飛翔祭」

生徒数の減少をきっかけに始まった高松中学校と地区住民体育祭の合同開催「飛翔祭」は、昨年11回目を迎えました。中学生と地域住民が同じフィールドで汗を流すこの行事は、顔が見える関係性を築く貴重な機会となっています。令和7年度には、幼稚園・小中学校・地域合同の防災訓練も実施しており、「地域の安全は地域全体で守る」意識が育っています。



地域・中学校合同体育祭「飛翔祭」→

○ その3・・・【未来を繋ぐ】跡地をひまわりの迷路に「花いっぱい事業」



高松小学校跡地を活用した「ひまわり迷路」やコミュニティガーデンは、地域の皆さんの手で手入れされています。通勤・通学路を彩る花々は、道行く人の心を和ませ、自分の住んでいる街への愛着を育てています。「自分たちの街を自分たちで魅力あるきれいな街に」という小さな一歩が、高松地区の景観をみんなで作っています。

デジタルとアナログで届ける 地域の情報発信「たかまつ」の今

高松地区の活動の様子は、年間4回発行の広報誌「たかまつだより」に加え、公式Instagramでもリアルタイムに発信しています。伝統的なかるた大会から最新のイベントまで、ライブ配信なども活用しながら「今のたかまつ」を地域内外へ情報を届けています。



誰もが主役！ほっとステーション ～さんふらわあ宿泊体験学習～

\ほっとステーションとは？/

様々な理由で学校に足が向かなかったり、友人関係に不安を感じたりと悩みを抱える子どもたちに、学校外の体験活動や異年齢の交流活動を通して、楽しいと思える場、ほっとできる場を提供します。

令和7年11月16日(日)～11月17日(月)大洗港に停泊中のフェリー「さんふらわあ ふらの」船内を会場に「誰もが主役！ほっとステーション」が一泊二日で開催されました。支援者から29のわくわくプログラムが用意され、参加した子どもたちは自分で選択し、オリジナルな二日間を充実させていました。(対象：小学5年生～中学3年生)



水戸教育事務所
はねいし やすひろ
羽石 康弘 氏



さんふらわあ
宿泊学習HP

【協賛】茨城トヨペット、NPO ひと・まちなつとわーく

【協力】商船三井さんふらわあ、みと青年会、大洗町高校生会、筑波大学太刀川研究室、NPO 法人日本セラピードック協会、水戸教育事務所管内市町村教育委員会（敬称略・順不同）

【ほっとステーション実行委員会】

会長 小沼公道（笠間市教育委員会教育長）

副会長 長谷川馨（大洗町教育委員会教育長）

鈴木昭博（茨城県水戸生涯学習センター次長兼企画振興課長）

羽石康弘（水戸教育事務所主任社会教育主事）、大口武文（茨城県水戸生涯学習センター社会教育主事）、石井浩司（水戸市社会教育主事）、山田敏晴（笠間市社会教育主事）、三澤秀生（小美玉市社会教育主事）、渡邊秀幸（ひたちなか市社会教育主事）、川野邊慧（大洗町教育委員会主任）、蔀実（大洗町社会教育主事）、坂田洋平（東海村社会教育主事）、阿部智仁（那珂市社会教育主事）、伊藤千智（茨城県水戸生涯学習センター社会教育主事）、高村勇志（ひたちなか市立佐野中学校教諭）、郡司崇人（ダイバーシティ推進センター主査）、植竹智央（茨城県青少年育成協会理事）

社会教育関係者の活躍！！



輝 き 人

～多様な人が結びつく、生涯学習のまちへ～



おがさわら のりこ
小笠原 紀子
一般社団法人
Compani (カンパニー)
代表理事

子ども・高齢者・外国人家庭など、地域の多様な人々をゆるやかに繋ぎ、学び合う場をつくり続けている一般社団法人Compani（カンパニー）。その代表理事を務めるのが、小笠原紀子さんです。小笠原さんが大切にしているのは、「**学びは学校や講座だけのものではなく、暮らしの中にある**」という考え方。下妻市を拠点に、人と人が自然に関わり合う居場所づくりに取り組んでいます。

暮らしの中にある「学び」を大切に

小笠原さんの活動の出発点は、「**学びは特別な場所だけで起こるものではない**」という気づき。日々の生活の中で、人が出会い、話し、支え合うこと自体が学びになると考えています。



社会教育がつなく、人と人、世代と世代

学校でも職場でもない場所で、人が出会い、体験し、学び合う。その積み重ねが、**生きやすく、助け合える地域**を育てます。

子ども食堂「お茶 NOMA」から広がるつながり

拠点となっている子ども食堂「お茶 NOMA」には、宿題を持った子ども、高齢者、外国人家庭の方など、さまざまな人が集います。①子どもは宿題をする②高齢者は昔の遊びや知恵を伝える③外国人家庭は母国の料理や文化を紹介する。そこには「先生」と「生徒」という固定された関係はありません。互いの得意なことを持ち寄り、**相互に学び合う関係が自然に生まれています**。



生涯学習の場が点在するまちへ

「**特別な施設がなくても、人が集まれば、そこが学びの場になる**」小笠原さんが目指すのは、地域のあちこちに生涯学習の場が点在するまち。多様な人が結びつき、行政と地域が支え合い、社会教育がその間をつなぐ——そんなまちを、仲間とともに作り続けています。



みんなのひろば

「みんなで学ぶ生涯学習」みんなの輪を
ひろげるためにリポートを依頼しています。



一般社団法人 オリーブ協会



代表理事 みさわ よしえ 氏
見澤 淑恵 氏

今回は中央地区から見澤 淑恵氏のレポートです。
オリーブの木は品種も多く、その実は薬にもなります。そんなオリーブのように会員ひとりひとりの声が誰かにとって必要なものになればという願いを込め「オリーブ」を団体名として、朗読と紙芝居で「伝える」活動を続けてきました。2025年4月に一般社団法人オリーブ協会を多くの方々のご指導・ご支援のもと設立することができました。

<主な上演作品>

戦争の紙芝居 三部作

・「ある紙芝居屋の物語」

・「茂木貞夫物語」

・「高橋久子物語」

体験者の証言から

・「義勇軍物語」

・特攻隊員の遺書

・原爆体験証言集、水戸空襲戦災誌



フェイスブック



インスタグラム



一般社団法人オリーブ協会ホームページ

<https://sites.google.com/view/roudokuolive/>

作品等の上演のほかに、人財育成として朗読・読み聞かせのスキルアップ研修にも取り組んでいます。水戸二高支部もでき、多世代で次世代につなぐ活動が展開できるようになっています。みなさんと連携して活動を広げていきたいと考えています。よろしくお願いします。

連絡先：水戸市水府町 1502 TEL 090-2143-8541 (事務局)

社会教育を楽しむ

“財務なきところに職務なし” というけれど…

元派遣社会教育主事 鈴木 洋一

■ 大子町での3年間と子どもたちの成長

1990年代、私は派遣社会教育主事として大子町で過ごし、戸惑いながらも中学生のカナダ海外体験事業を中心となり取り組んでいた。異文化に触れていく子どもたちの姿は本当に生き生きとしていて、その成長ぶりは今も心に残っている。けれど現在は、財政状況が厳しく、以前のように「予算があるからできる」という進め方は難しくなっているのかな。

■ 総合芸術家 山岡 草との出会いが教えてくれたこと

任期も残り半年となったころ、新聞で水木しげるの書いたコラム欄に“山岡 草”の訃報を知った。作品を守りたいという気持ちが自然と湧き上がり、心と体が自然と動き出していた。和歌山市の遺族や東京のマスコミ関係者を訪ねながら動き続けた経験は、社会教育が持つ「人の思いをつなぐ力」を深く感じる事となった。

■ いま求められるのは“つなぐ力”

現在の社会教育主事に求められるのは、豊富な予算ではなく、人や地域、学校をそっとつなぐコーディネートの力だと思う。地域にはさまざまな知恵や経験を持つ方々がいて、その力を結びつけることで、事業は少しずつあたたかく育っていくのだ。

■ 社会教育の根っこにあるもの

時代は変わっても、社会教育の本質は変わらない。人が学び、人がつながり、地域が豊かになる。その営みこそが、地域の文化と人を未来へつなぐ力になると信じている。



すずき よういち 氏
鈴木 洋一 氏

茨城県生涯学習・社会教育研究会研修会

地域の交流・学習の拠点としての公民館に求められること ～社会教育法から考える～

講師 筑波大学名誉教授 手打 明敏 氏

公民館の未来：「つどう」「まなぶ」「むすぶ」拠点へ

令和7年11月8日、筑波大学名誉教授の手打 明敏 氏による講演会を開催しました。「地域の交流・学習の拠点としての公民館に求められること」をテーマに、公民館が果たすべき役割と、社会教育法における解釈について解説いただきました。

手打氏は、公民館の最も重要な機能として、人々が「つどう」「まなぶ」「むすぶ」という3つの要素を挙げられました。公民館は、地域住民の自由な交流と学びの場として、地域に開かれた社会教育施設であるべきである。

特に、公民館の活動を規定する社会教育法第23条に関する解説は示唆に富むものでした。この条項は、公民館が主催する事業などに対する規制（例えば、政治的中立性の確保）を定めたものであり、地域住民が行う学習活動を規制するものではないと強調されました。

講演では、住民が主体的に活動し、公民館がそれを支援することで、地域を「むすぶ」拠点として機能している全国の事例が多数紹介されました。

公民館は、地域住民の自主的な学習・交流活動を積極的に受け入れ、支援することで、その役割を最大限に発揮することが求められています。



手打 明敏 氏

多様な学びの場を創造する2

茨城県生涯学習・社会教育研究会研修会

令和7年11月29日、「多様な学びの場を創造する」をテーマにシンポジウムを開催しました。

岩間 里菜（いわまりな）氏 哲学対話 LiLa 代表

岩間氏は、「子どもが哲学する場」の重要性を強調しました。正解のない「問いから始まるケアの共同体」を創り出すことで、子どもたちが自ら考え、他者との対話を通じて多様な価値観に触れる、本質的な学びの場提供している事例を紹介してくださいました。



岩間 里菜 氏



児玉 正人 氏

児玉 正人（こだまさと）氏 カフェはなな 店主

児玉氏は、「多様な学びの場における共育（きょういく）のかたち」を提唱してくださいました。年齢や立場を超えて誰もが先生であり、生徒である環境が、地域社会における相互理解と成長を促すことを示してくださいました。

伊藤 哲司（いとうてつじ）氏 茨城大学人文社会科学部 教授

伊藤氏は、「学校を地域にひらく」というテーマのもと、つくば市の小学校におけるコミュニティ・スクール「にのこみ」の実践事例を発表してくださいました。学校運営に地域住民が参画することで、学校が地域の財産となり、子どもたちの学びと生活の質を高める挑戦の成果を報告してくださいました。



伊藤 哲司 氏

長谷川 幸介会長から

「発表全体を通して『実際の体験に勝るものはない』という強いメッセージを感じた」と述べました。体験したことを言葉にする過程で、その本質的な感覚や熱量が失われてしまう「ずれ」が生じる可能性を指摘し、実践の場から生まれた学びの価値を再認識する機会となりました。学校、地域、家庭がそれぞれの壁を取り払い、主体的な対話と参画を通じて未来を担う子どもたちのための豊かな学びの環境をいかに創造していくか、その具体的な実践と哲学を共有する貴重な場となりました。

研究会報告

令和7年度の主な事業

◎ 定期総会・研修会

- 期 日 令和7年6月7日(土) ○ 会 場 茨城県立青少年会館 ○ 参加者数: 63名
- 講演「ひと・まちねっとわーくとの共催」
演題「社会教育の視点からみた学校統廃合と地域づくり」
講師 筑波大学人間系教育学域准教授 丹間 康仁 先生

◎ 第11回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会(本紙1面に掲載)

- 期日: 令和7年12月12日(金) 13日(土) ○ 会場: 茨城県水戸生涯学習センター
- 参加者数: 408名 ○ 分科会(4分科会: 各分科会3事例発表)
- 特別講演
演題 「分担と砲弾の時代どう乗り越えるか 国際協調主義と日本の役割」
講師 一般社団法人共同通信社 特別編集委員兼論説委員 半沢 隆実 氏
- トークセッション
テーマ「平和と多文化共生社会の実現に向けて～未来のために今わたしたちができること～」
日本国際学園大学経営情報学部3年 トロブチン・ニキタ 氏(茨城県留学生親善大使)
茨城県立水戸第一高等学校2年 中垣 美咲 氏(令和7年度高校生平和大使)
水戸市立常澄中学校2年 大場 星寧 氏(令和6年度水戸市平和大使)

◎ 会員研修会①(本紙6面に掲載)

- 期日: 令和7年11月8日(土) ○ 会場: 茨城県水戸生涯学習センター
- 参加者数: 17名
- 講話
演題「地域の交流・学習の拠点としての公民館に求められること—社会教育法から考える—」
講師 筑波大学名誉教授 手打 明敏 氏

◎ 会員研修会②(本紙6面に掲載)

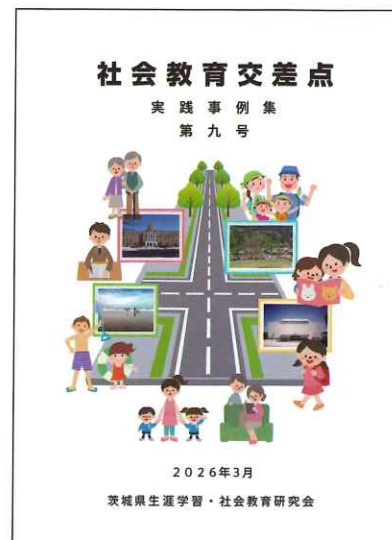
- 期日: 令和7年11月29日(土) ○ 会場: 茨城県県南生涯学習センター
- 参加者数: 44名(対面31名、オンライン13名)
- シンポジウム
テーマ「多様な学びの場を創造する2」
NPO法人こども哲学大人哲学 LiLa 代表 岩間 里菜 氏
カフェはなな 店主 兒玉 正人 氏
茨城大学人文社会科学部 教授 伊藤 哲司 氏

◎ 地域実践活動発表会(本紙2面に掲載)

- 期日: 令和8年2月14日(土) ○ 会場: 茨城県県北生涯学習センター
- 参加者数: 68名
- 実践事例発表
 - ①「かぶと虫の里」14年の歩み(交流人口増を目指して)
折橋芸(能・農)部
 - ②「子どもたちの未来を作る学習支援」
特定非営利活動法人ひたちNPOセンター・with you

◎ 実践事例集「社会教育交差点第9号」の発刊

◎ 広報紙「みんなで学ぶ生涯学習」第15号発行



つながりをもとめて

茨城県生涯学習・社会教育研究会の 発展と新たな絆づくりのために



茨城県生涯学習・社会教育研究会
会長 長谷川 幸介

茨城県生涯学習・社会教育研究会は、民間の立場から、茨城県民の生涯学習・社会育活動を協働・支援するべく産声を挙げることになりました。15年以上も前のことです。

従来の社会教育推進体制を官民協働で充実することと社会教育主事の活躍できる時空を拡充することが目的でした。全国的に進行した社会教育主事の縮小の中で、茨城県は、県生涯学習課の拡充戦略と努力により飛躍的に増大した特筆されるべきものとなりました。

そして、関東近県の実践交流集会を開催するという課題を、新たに背負う使命を分担することにもなりました。九州・四国を中心として開かれ続けている実践交流集会の関東版を期待されたのです。

端的に表現すれば、激動の15年と言えます。初代会長の菊池龍三郎先生の下、茨城の社会教育力を結集した成果だったと思います。

しかし、時代は動き続けます。立ち留まることは衰退を意味するような速さで社会は変化し続けています。私たちは、今一度、周りを直視し、「今」を確かめることが重要になっています。新しいつながりが急務だと考えています。多様で、広範な分野で行われている市民活動分野との連携は未だ道半ばです。社会教育の理念の下に、参集して、活動し続けているのは私たちだけではありません。国際情勢も不穏な気配が蠢動し始めています。人間の幸せを実現できる学びの真価が問われているように感じます。ともにあることを！

入会方法について

「新しいつながり」を求めて！

茨城県生涯学習・社会教育研究会の会
員を募集しています。

皆さんの地域で見聞きした社会貢献
活動や社会福祉活動に関わる方や地域学
校協働活動に取り組まれている方、興味
のある方等への広報をお願いします。

右QRコードを読み取り、ホームペ
ージから入会申込書をダウンロードして
手続きを進めていただくか、入会フォー
ムから手続きを進めてください。

皆様方のご入会を心からお待ちして
います。



ホームページ

<https://ibasharen.wixsite.com/ibaraki-shou-sha>



入会フォーム

<https://forms.office.com/r/n9gZEJ5abu>

【お問い合わせ先】 茨城県生涯学習・社会教育研究会 事務局
担当 大月、村木 TEL 029-225-6991

編 集 後 記

会員の皆様にはご精励のこととお喜び申し上げます。広報紙「みんなで学ぶ生涯学習」第15号をお届けいたします。ご多用の中、玉稿をお寄せくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

今回は、編集委員と各教育事務所の主任社会教育主事の先生方と協働して、対面とメールを活用してアイデアを出し合い内容等を考え作成にあたりました。

お読みいただいた皆様に、是非この広報紙を片手に茨城県生涯学習・社会教育研究会への入会を勧めて「新しいつながり」ができることをお願いいたします。(ES記)